

平成 29 年度こどもひろば活動報告

(1) 教室開催実績(日本語・教科学習支援活動)

- 年度開催回数: 46 回
- 延べ参加者: 1921 名(学習者 1021 名、スタッフなど 900 名)
(祝日月曜日は補習教室とし対象は受験生のみ)
- 参加学習者のルーツ: 11 か国 (中国、韓国、台湾、フィリピン、ベトナム、モンゴル、ネパール、タイ、ロシア、シリア、ペルー、)
- 交流会開催(進学・進級お祝いパーティー): 3月26日
- 補習教室開催:8月～3月。週1～2回、実施回数31回。
参加者合計 356 名(学習者195 名、支援者161 名)
参加者ルーツ:中国、フィリピン、ネパール、ロシア
- 高校生勉強会:開催期間6月～12月、実施回数28回、
参加者合計248名(学習者126名、支援者122名)
参加者ルーツ:中国、韓国、参加学校:7校

(2) こどもひろば同窓会

内容:ブドウ狩り

実施日:9月4日

会場:富田林サバーファーム)

参加者:36名(うち当事者28名、支援者8名)

(3) 教室外支援活動 55 回、延べ支援者数69名

- 受験支援関連(進路ガイダンス、説明会、合格発表、応募資格審査(府教委手続き))
- 進路相談(保護者面談など)、学校行事などへの参加や応援
- 関係先連携などで進路に関する相談、情報交換など

(4) 母語支援者派遣活動: 計 12 回・延べ 12 名、3 言語(中国、フィリピン語、英語)

別途翻訳等支援:中国語 ベトナム語 英語

※(3)(4)については「こども基金」(シナピス)の助成を受けた

(5) 他団体との連携

- 外国にルーツをもつ子ども支援ネットワーク大阪会議(大阪国際交流センターと共催)
事例研究会(毎月1回)
- Minamiこども教室実行委員会参加
- 外国の子ども白書交流会参加【6月30日】

(6) 広報およびボランティア募集活動(毎月初(月)に活動説明および見学会を開催)

(7) 進学実績

合格者: 22 名(うちダイレクト 7 名)

- 府立高校編入: 1名(中国)
- 私立高校: 2名(中国、タイ)

- 特別入試(2月): 府立高 17 名(中国、フィリピン、ネパール)
- 一般入試(3月): 府立高校 2 名(フィリピン、タイ)

(8) 活動報告

1. 全般

学習支援は通常教室(月曜)、補習教室(木曜、祝日月曜)に行った。1 月からは補習を金曜日にも実施し学習機会を増やした。

今年度はダイレクト学習者が7名と少なく、中学3年生の参加が際立って多かった。ダイレクト学習者の担任となったスタッフへの負荷は今年も大きかったが、昨年の経験を活かしてより主体的な動きが見られた。その子どもの進路について真摯に考え、必要な支援について話し合う姿がみられた。

作文や自己申告書の添削指導は元学習者の大学生が母語で行った。受験直前の来日・参加があり、短時間での子どもの状況把握や進路についての情報提供が必要で多忙であったのに加え、今年度は中学生の積極的な参加が多く、個別の相談や対応がかなりあった。相談や面談は保護者および母語支援者の都合に合わせて随時実施した。会場は:大阪国際交流センターの全面的な協力を得られたため問題なかった。

例年通り、教室外活動として多言語進路ガイダンス、今年初めて、併願を視野に入れての私立高校を含む学校説明会にも引率した。手続き等への引率同行に必要なに応じて母語支援者を配置した。日本語が堪能な保護者が通訳を引き受け支援者として活動に加わった。

特別枠とよばれる「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜」では今年は東淀川高校への出願が多く、最多の不合格者が出てしまった。こどもひろば参加者にはこの予想を早くから伝えてあり、真剣に受験準備に取り組むよう声をかけ続けた。多くは熱心に学習に取り組み、また志望校選択についても慎重になった。このためダイレクトにも中学生にも不合格者はいなかった。こどもひろばの長年の経験からの出願傾向の把握や情報の分析をし、受験担当スタッフ間で共有された各子どもの可否の可能性の判断は適格だったと思われる。また保護者と子どもたちからの信頼も厚かったため、助言が受け入れられた結果であったと評価できる。

受験支援にとどまらず、いろいろな相談や子どもたちからの要望が持ち込まれた。複雑な家庭事情を持つ子どもの、在籍校、日本語指導者、他の支援団体、地域支援教室など関係各所との情報交換も欠かせない活動であった。これによって、大人の事情に振り回される子どもに寄り添える支援が可能になった。さらに近年は、大学進学相談、大学生となった元子どもからの就職相談、日本語でのレポートの添削依頼なども舞い込むようになっているのはこどもひろばへの信頼の証と考えたい。

昨年度から始めた担任制を今年も実施し、学習状況把握や手続き、保護者面談も主体的に担ってもらってスキルアップができた。昨年度の経験を活かして年度前半で資格審査ハンドブック【2014年作成、2015年改訂】を改訂してもらった。次年度では研修などに利用するほか、他の支援現場に生かしてもらうために公開を予定している。

2. ダイレクト支援

今年、ダイレクト受験生は7名と少なかった。府教委(担当:高等学校課学事グループ)にも問い合わせが少なく、受験に必要な審査件数も少なかったようだ。夜間中学での既卒者の「学び

なおし」が法的に可能になり、外国からやってきた既卒の子どもたちの受入が進んだか、または、卒業前に来日して中学校に編入しているのではないか？と思われる。

〈中国ルーツその1〉

ダイレクト7名のうち中国2名は来日時期が12月と1月で、入試直前に参加してきたため、日本語を持たないまま、受験に臨まざるを得なかった。情報提供に尽くし、確実な学習を実践させながら、その学力を見ながら選択肢を示した。彼ら2名は学力が高いことがすぐに判明し、「日本語指導が必要な帰国生徒選抜」で2名ともそれぞれの志望校に合格できた。

〈中国ルーツその2〉

早めの参加だった中国ルーツ女子の方がスタッフの不安材料になった。中学卒業を期に呼び寄せられたが、学習意欲が低く、孤独な生活でスマホ依存が甚だしく昼夜逆転し体調不良がつづいた。不本意な来日と親子関係の不調で彼女の意欲減退は進むばかりだった。全く学習が進まないため、親子別の面談をしたり生活面のアドバイスをしたりする中で少しずつ本人とスタッフとの関係が良いものとなり、若干の改善は見た。但し、その学力では本人と保護者が希望する高校への合格は難しいという判断がスタッフ全員にあったため、直前まで丁寧な対応と助言を繰り返した。出願当日も長時間話し合い、志望校を変更してもらって無事合格した。

〈フィリピンルーツ女子〉

10月に現れたフィリピンルーツ女子は高校2年生まで母国で修めながら、6月呼び寄せ来日し無為のままであった。面談で助言したが遠方のためか参加が少なく、保護者や本人の意向も十分つかむことができず、学習支援もままならないまま時間が経った。連絡もとれない状況になり、一旦、支援は無理と判断した。ところが2月下旬に書類を持って教室に現れた。急きょ海外編入への支援を開始し、3月末に希望の高校に編入が叶った。この例の困難は、学習や話し合い、準備の必要性を保護者に理解してもらえなかったことが一因のようであった。書類さえ見せれば高校に入れるという理解を保護者がしていたのではないかと推察する。日本の生活は長くても生活言語しかなく、学校制度の違いに無頓着のためか、手続きや学習の助言などを受け止めてもらえず、担任スタッフの思いが空回りしていた。

3. 中学生支援

中学3年生の登録は最終24名いた。実際の学習参加は15名程度だが、子どもたちは積極的に、支援スタッフが不足し学習支援が難しかった。フィリピンルーツの子どもたちは数学が不得手のため、1月からは高校生勉強会を補習に振り替えて学習機会を増やした。週3回の学習機会を利用して、学力の向上や進路選択の助言もこまめにできた。

〈ベトナムルーツ男子〉

小学生からの参加のあった子どもだが、塾に行くようになって教室参加は中学2年で途絶えた。スタッフにとって気にかかる子どもで、折にふれ話題に上る。保護者や家庭の状況、これまでの本人の学び、来日時の日本語指導の際の様子(当時の担当教員がスタッフにいる)を進路指導の参考にしていただくために、中学校に情報提供を申し入れた。担任教員が感じていた保護者や家庭へのアプローチの難しさを共有した。男子は3月末の合格祝賀の交流会に保護者と参加してくれた。

〈フィリピンルーツ女子〉

5月から参加していたが10月に他県に転居、転校した。日本語指導教員との情報交換で判明したのは家庭事情と学校の対応のまずさであった。同居の日本人男性が保護者として学校と

話をするようになり、子どもの体調不良を理由に転地させると転校させてしまった。実際には転居先で転校手続きはなく、所在不明となってしまった。1月にはスタッフが Facebook で本人を見つけフィリピンにいたことが判明した。2月半ばに再来日、市内の中学校に再転入してきて、学校関係者を慌てさせた。実情は、同居男性のDVから逃れて、子どもは安全のために一時帰国、母親がRINKに支援を仰いでいた。これらの事情は連携先のRINKから学校より先に知るところであった。家庭訪問し母子と再会をした後、本人はこどもひろば教室で友人とも再会し、学習に励んだ。教室全体で事情を共有し暖かく見守った。再来日して住み始めた地域からの夜間の通級は不安であるため送迎や付き添いをした。3月に高校に合格したが、経済的に困窮しており準備費用の不足の相談を受けた。高校に連絡して対処していただいた。

4. 多様な活動

<高校生以上対象>

通常教室では高校生も学習しており、その中にはボランティアとして活動する子どもも毎年数名いる。ただ彼ら自身も次の進路選択を迫られていて、スタッフに相談する場面はかなり多い。とくに面接の練習をしてほしいという要望は必ずあり、日頃接触のない大阪国際交流センターのスタッフに面接官役を依頼し、協力してもらっている。今年も、進路に関して親との意思疎通がうまく行かず精神状態が不安定になっていた中国ルーツの高校2年生のために、彼女が通学している予備校の担任に依頼して大学受験準備についてのレクチャーと一緒に聞いたり、共通の地域支援教室で保護者との面談をして親子の仲介したりと対応した。モデルとなるよう中国ルーツ大学生にも来てもらった。

高校の課題研究として「外国の子どもの困っていること」をテーマに選んだネパール高校生からアンケート協力依頼があったため、地域支援教室複数に拡散しアンケートを集めた。この彼の研究発表は校内のコンテストで金賞を受賞した。後日、こどもひろば教室でも披露してもらった。

タイルーツ26才が家族の問題でトラブルになっており事情を聴くことにした。RINKのタイ語話者も彼ら家族と長く付き合いしており、知っている範囲の事情や経緯を教えてもらった。他団体を通じて弁護士に法的責任の有無など確認をとり示談交渉に同席した。この元学習者は15才で来日しダイレクト受験した元子どもで、高校卒業後は職を得て自立している。タイ語支援が必要なときは教室に駆けつけてくれる関係が長年保たれていた。

5. 見えてきた課題と今後の展開や波及性

第1の課題は変わらず人材不足である。

中国語支援者は複数おり、とくに当事者の高校生、大学生スタッフを教室での作文指導や教科指導、教室内での面談には活躍してくれたが、平日の教室外の同行支援は難しいことが多く、これらの活動に同行してくれる母語支援者を確保することが必要だ。ベトナム語支援者がこれまで身近にいなかったが、今年度は関係を深めた他団体所属の支援者に教室文書に翻訳を依頼することができた。このベトナム語支援者は今後も協力を申し出てくれている。ベトナム語支援者もフィリピン語支援者も活動の拡がりの輪で、こどもひろばの活動に協力してもらえるようになってきたが、緊急の場合は難しいだろう。

制度やケースワークに習熟した支援者も不足している。外国ルーツ子ども支援であるがゆえに必要な、様々な知識は、活動しなければ得られないもので、このため、担任制を継続しボランティア育成につなげたい。人材育成の観点からも当事者の高校生や大学生の活動参加をさらに

促していく。

また制度自体の問題も大きい。大阪府の教育改革の影響で入試制度が毎年のように変わり、手続きは煩雑化する傾向にある。窓口の行政担当は3年で異動してしまうため、各種相談や手続き対応でその場しのぎなのか、とも感じることもある。昨年度問題になった、外国人受験資格の審査と在留資格の関連について、府教委と話し合う機会はまだ作れていない。

府教委だけでなく学校現場での判断もしばしば、果たして子どもたちの利益になるかどうかを考えているのか疑問に思うこともある。明らかな制度理解の不足や、情報収集努力の不足も散見され残念だ。こどもひろばから、根気強くアプローチを続けて、学校現場からも信頼を勝ち得て共に子どもを支えられるように持っていきたい。

子どもの周囲が連携することの効果は明らかで、学校や行政ができない支援は地域が得意とするところだ。我々こどもひろばは一人ひとりの外国ルーツの子どもと向き合って、地道に支援を重ねていこうと考えている。